

6～12月 「これなあに？ はらぺこあおむし」 ～ 子どもの興味から遊びにつなげていく ～

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- 日々、『はらぺこあおむし』の絵本に親しみ、歌に合わせて自分でページをめくって楽しんでいた。5月のある日、保育者は園庭の夏ミカンの木にクロアゲハの幼虫がいるのを見付け、子どもたちに見せた。子どもたちは、「これなあに？」「はらぺこあおむし？」「チョウチョになるの？」と絵本のイメージに照らし合わせ、思い思いに話したり、疑問に思うことを保育者や友達に伝えていた。

ねらい

- 身近な昆虫や植物に興味をもち、保育者と一緒に気付きや発見を喜ぶ。
- 経験したことの中から同じようなイメージをもち、保育者や友達と一緒に見立てたり、なりきったりして遊ぶことを楽しむ。
- 興味のあることや経験したことを、保育者と一緒に自分なりに好きなように表現する。



エピソード

6月 あおむしさんのうんち 幼虫を飼育箱に入れてクラスで育てる。朝、登園して、飼育箱を保育者とのぞくと、幼虫は糞をたくさんしており、「うんちいっぱい！」「私も朝、うんち出たよ」「いっぱい葉っぱ食べたんだね」と気付いたことを保育者に伝える。

10月 サナギってこう？ 『はらぺこあおむし』の絵本を読むと、チョウチョのまねをするだけでなく、「サナギってこう？」と、床に丸まってサナギになりきったり、実際のサナギを見た経験から、少し高い場所を探して丸まったり、思い思いに自分なりのサナギを表現し、楽しんでいる。



12月 友達と一緒に 果物のトンネルや、サナギやチョウチョになりきることを普段から楽しんでいたのので、『はらぺこあおむし』の劇ごっこをすることに。大型絵本やCDを使って、子どもたちは友達と一緒に同じ動きをすることや、声を合わせることを楽しんでいた。



保育者の援助

- 保育者自身が可愛がっている姿を見せ、命の大切さを知り、親しみをもてるようになる。

- 子どものイメージを大切に、思い思いの場所でサナギや、チョウチョになって、表現できるようにし、保育者も一緒に楽しみ、共感する。

- 保育者の絵本の読み聞かせと一緒に、声を合わせることで、声を合わせるおもしろさや、友達と一緒に遊ぶ心地よさを感じられるようにする。

環境の構成

- 子どもたちが興味をもったり、触れたりできるように、いつでも手に取れる場所に飼育箱を常設する。

- さらにイメージを膨らませ楽しめるように、絵本同様にくぐって遊べる果物のトンネルを用意する。



- 友達と一緒に同じ動きをすることが楽しいと感じられるように、大型絵本やCDを用意する。



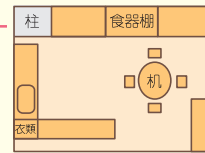
「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 絵本や図鑑からだけではなく、直接的な経験を通し、温かさや柔らかさ、弱さ等を感じ、命の大切さを感じ取ったり、実際に動く様子を見たり触れたりして、身近な生き物に気付き、親しみをもつ。
- ★ 絵本や紙芝居等から新たな言葉と出会い、言葉の感覚や語彙を豊かにし、言葉そのものの音やリズムの響きもつおもしろさを繰り返し楽しむ。
- ★ 身近な環境と遊びが重なり合い、継続的に遊びを展開していくことで、子どもの興味や関心が深まり、自分なりのイメージを広げ、伸び伸びと表現できるようになる。それを保育者に受け止めてもらったり、友達と楽しい気持ちを共有したりする。

9月「お弁当をつくったよ！ピクニックに行こう！」 ～子どもが生活を再現できる環境づくり～

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- ままごとコーナーでは、特定の子どもが食材に見立てたチェーンリングやお手玉等を皿に盛って食卓を囲んだり、人形を寝かしつけたりして遊ぶことが多い。まだ食材を調理するまねや、買い物ごっこ等をするのはほとんどない。
- 棚の背面から手を伸ばして食材を取ったり、棚に足をかけて別の玩具を取ろうとする等、使いにくそうな様子も見られた。



ねらい

- 友達に関心をもち、同じ場で過ごしたりまねたりすることを喜ぶ。
- 経験したことの中から同じようなイメージをもち、見立てて遊ぶことやごっこ遊びを保育者と一緒に楽しむ。
- 自分のしたいことや、してほしいことを言葉やしぐさで伝えようとする。

エピソード

遊びの動線を考えて、ままごとコーナー内の設定を変更し、家庭と同じようにスペースを分けたことで、それぞれの遊ぶスペースが確保され、落ち着いて遊び込めるようになった。また、大きめの布を用意するとレジャーシートに見立ててピクニックごっこを楽しんでおり、種類ごとに食材を入れているかごを準備すると、自然とお店屋さんごっこへと発展し、遊びの広がりが生まれた。クローゼットには引き出しとハンガーパイプを設定したところ、スカートやハンカチを保育者と一緒に畳んで片付けたり、ハンガーにかかっている衣類を取り出したりすることを楽しんでた。冷蔵庫にジュース（色水）を入れて冷やしたり、食材に見立てたチェーンリングやお手玉を容器に入れて保存したりする姿が見られた。



保育者の援助

- 一緒に遊ぶ中で、子どもの見立てや表現を受け止め、一人一人のイメージを広げるように関わる。
- 子どもの表現する世界を大切にしながら、保育者が仲立ちとなって子ども同士の世界をつなげ、友達とイメージを共有した遊びへと発展できるようにしていく。

環境の構成

- 経験したことや、イメージしたことが再現できるように、ままごとコーナーは家庭と同じような場の構成にする。
- 子どもが見立てて遊ぶことを楽しめるように、イメージが広がる大きな布や、玩具の食材が種類ごとに入ったかごを用意する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 身近な出来事や日常生活の中で興味のあることをまねて、ごっこ遊びを楽しむ。
- ★ 保育者を仲立ちとして友達と一緒に楽しく遊ぶ経験を積み重ねることで、興味や関心が深まり、子ども同士の世界がつながり、友達とイメージを共有した遊びへ発展する。
- ★ 生活や遊びの中で保育者を仲立ちとして、自分の思いを相手に伝えたり、相手にも思いがあることに気付いたりすることで、友達と言葉による伝え合いが芽生える。

「自分でできたらいいな」

これまでの子どもの姿（経験してきたことや育ち）

- トイレでの排泄の姿については、自分から保育者に尿意を知らせてきたり、保育者がタイミングを見てトイレに誘えば、トイレで排尿したりする子がいた。その反面、トイレで排泄する他児のまねをして、尿意がなくても便器に座る子や、トイレに興味を示さない子等、子どもによって様々な様子が見られた。

ねらい ● 保育者に見守られながら、排泄や着脱等、簡単な身の回りのことを自分でしようとする。

エピソード 一人一人のタイミングに合わせて、トイレに誘うように心掛けていた保育者は、フープを電車に見立てて遊んでいたA児に「トイレに行こうか?」と誘ってみた。すると、A児は嫌がるそぶりを見せなかったため、A児の遊ぶ姿を受け止めながら、保育者もフープを利用して一緒に電車ごっこをし、その延長でトイレに行けるように考えた。保育者が「次は〇〇駅に向かいます」と言うと、A児も「ガタンゴトン」と言いながら付いて来た。保育者はトイレの前まで行き「〇〇駅到着、終点です」と言ってフープの電車から降りると、A児も電車から降り、保育者と一緒にトイレに入っていった。

保育者の援助

タイミングはどうだろう……

- 排泄の間隔や、タイミングは一人一人の状況を把握する。
- 大人がつくり出す“節目”ではなく、子どものタイミングに合わせて誘い、遊びを中断しないようにする。
- おむつを外す時期は家庭と連携し、子どものペースを尊重して進める。
- 個人差があるので、子どもが無理なく、安心できるように焦らず援助する。

誘い方を変えてみたら……

- 遊びと生活を切り離して考えず、遊びの一部として保育を組み立てる。

寄り添い方は……

- トイレで一人になると不安になることもある。個々の状況に合わせ、そばで見守ったり、距離を置いて見守ったりする。
- 排泄が便器でできたときや、尿意や便意を伝えられたときは「すごいね」「おしっこしたくなったら教えてね」等と声をかける。排泄が成功したら、一緒に喜び、自信や達成感を味わうことを大切にす。
- 便器の使い方やトイレットペーパーの量、水の流し方等、トイレの使い方を子どもと一緒に確認していく。

環境の構成

- 冬は、子どもが冷たい思いをしないように、トイレの床にマットを敷いたり、便座カバーを付けたりする。
- 子どもたちがトイレに行きたいと思えるように興味のある絵を貼っておく。
- 自分でトイレットペーパーで拭く体験をするために、あらかじめ1回分をウォールポケットに入れておく。
- 自分でズボンを着脱できるような、高さの低い椅子や台を用意する。



「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 手洗いや衣服の着脱等、毎日繰り返されることについて、その流れや手順をある程度予測できるようになり、自分なりに取り組もうとする。
- ★ 尿意を自分で伝えたり、便器で排泄ができるようになったときに、「自分でできる」「自分でしたい」という自信や意欲が育つ。

事例から読み取る 2歳児 の特徴

- 保育者に見守られながら、簡単な身の回りのことを自分でしようとする。
- 自我が育ち、思い通りにいかず、怒ったり、泣いたり、自己主張をする。
- 周囲への興味が広がり、大人のまねや生活を再現する「ごっこ遊び」を楽しんだり、2～3人で同じ遊びをしたりするようになり、自分以外の他者の存在を意識する。
- 日常の挨拶だけでなく、人の言葉や話を聞いたり、自分の思いや経験を言葉で伝えたりする。



この時期に

大切にしたい保育者の 援助

一人一人に応じた関わりをするために

- この時期の「自分でしようとする」姿は自立へ向かう大切な姿である。その気持ちを受け入れ、急がずに子どものペースに合わせて、難しいことを保育者が援助する。
- 食事、排泄、睡眠、衣類の着脱等、生活に必要な基本的な生活習慣については、一人一人の状況に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行う。また、子どもが自分でしようとするこの意味と、保育園での対応やその意図を家庭へ丁寧に伝え、家庭との適切な連携を行う。
- 排泄のタイミングは、一人一人の排泄状況を把握して、子ども自身がトイレに行くことに興味をもったり、便器に座ってみたりするように促す。焦らずゆったりとした気持ちで見守り、うまくいったときに保育者が一緒に喜び、自信や達成感を味わえるようにする。

自分でしようとする意欲や諦めずにやり遂げた気持ちを大切にするために

- 強く自己主張するようになり、何でも自分でやろうとしたり、思い通りにいかず、不安定な感情を表出したりし、あらゆる面で自分の意思をもち、伝えようとする。その気持ちを保育者が十分に受け止め、気持ちの切り替えだけではなく、気持ちに寄り添っていく。同時に、子どもが決めたことを尊重し、見守ったり、援助したりしていく。

この時期の

環境構成の工夫

興味のあることや経験したことを自分なりに表現するように

- 身近に経験した出来事や日常生活の中で興味のあるもの等を題材とした遊びを用意する。
- 言葉や言葉のもつリズムのおもしろさを味わったり、絵本の中のイメージを楽しんだりしながら、自然に子どもの語彙が広がるような絵本や紙芝居を選んでいく。
- 自分から身の回りのことをやってみようとする気持ちが育つように、必要な物を子どもの手の届くところに置いたり、使いやすく分かりやすい配置の工夫をしたりする。
- 身近な自然や身の回りの物に関わる中で、発見や心が動く経験が得られるよう、諸感覚を働かせて楽しむ遊びやイメージが膨らむような素材を用意する等、保育の環境を整える。



6月「自分でできるもん!」

これまでの幼児の姿（経験してきたことや育ち）

- 「自分で!」という思いが強く、何でも自分でやりたがる。その結果、衣服が裏返しでも、靴の左右が反対でも、自分でできた喜びを感じていた。3歳児になり、衣服の前後の違いに気付く等、少しずつ生活習慣が身に付いてきたが、今度は「できるけどやりたくない、でもやらなくちゃ……」という情緒の面で葛藤する姿がある。

ねらい

- 身の回りのことや自分でできることをしようとする。
- 友達のしていることに関心をもち、一緒にすることを喜ぶ。

エピソード

3歳児から上履きを履くようになった。遊びを通して、子どもたちが楽しみながら生活習慣の自立へ向かうよう、家庭で子どもたちの好きな色のリボンを上履きの後ろ部分に付けてもらった。すると、子どもたちの生活習慣に対する気持ちにも変化が出たようで、「こうだっけ?」と自分で考えて履こうとする姿が見られた。A児は自分で履けたときにはうれしくて「できたよ!」とにこにこしながら保護者や保育者の前に足を出して誇らしげに見せている。その姿を見たB児は「できない〜」と保育者に甘えてくる。本当は自分も履けるようになりたいと思っているB児の気持ちを受け止め、一対一で丁寧に関わった。その後、B児は上履きを一人で履けるようになり、自分で履けた上履きをA児と見せ合い、笑い合う姿が見られた。



保育者の援助

- 自分でしてみたいという意欲が育つように、発達を丁寧に捉え、一人一人に合わせた手助けをしたり励ましたりする。
- 子どもの「やりたくない」「手伝ってよ〜」と保育者に甘える気持ちや、反対に自分で挑戦しようとする気持ちを十分に受け止める。
- ときには一対一でじっくり時間をかけて対応し、自分のことを見ていてくれる安心感を感じ、「自分でやってみようかな」という思いが育まれるようにする。
- 友達と同じようにできた喜びに共感し、タイミングを逃さず認めていく。

環境の構成

- 左右の違いが分かりやすいように、上履きに色違いのリボンをつける。
- 子どもの思いが継続できるように、落ち着いて取り組める場をつくる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 見守られていることで安心し、身の回りのことを自分でする。
- ★ 自分で考えてやってみようとする意欲やできたことに達成感をもつ。目的をもって行動したり、自分の気持ちを表現したりできるようになる。また、自分を信じて様々なことにチャレンジできるようになる。
- ★ 「これで合ってる?」「ねえねえ、反対じゃない?」等と友達と言葉で伝え合ったり、遊びを共有したりする。



健康な心と体



自立心



言葉による伝え合い

10月「大きな池、見つけた！」

これまでの幼児の姿（経験してきたことや育ち）

- 繰り返し散歩に出掛けることで、公園で何をして遊びたいか友達と話したり、周りの景色について会話したりしながら歩く等、友達とのコミュニケーションが増えてきた。
- 友達がしていることに興味をもってまねをし、少しずつ一緒に活動したり、共通の目的を見出したりする姿が見られるようになってきている。
- 体を動かして遊ぶだけでなく様々な自然物に触れ、ごっこ遊びをするようになってきている。

ねらい

- 自然物や身近な環境に興味や関心をもち、関わって遊ぼうとする。

エピソード

雨が降った翌日に、公園に散歩に行ったところ、子どもたちが大きな水たまりを見付け、「すごい、お水たまってるね」「何でここだけあるんだろうね」「池みたい」と口々に言いながら見ている。保育者は、子どもたちの発見に応え、一緒に見ていた。A児が近くにあった枝で水たまりをかき混ぜると、「色が変わった」とおもしろがる。さらに、濁った水の中に葉を見付け、近くにあった葉を水たまりに置いてみる。すると「お舟みたい」と葉が浮くことを発見する。浮いている葉をじっと見たり、持っていた枝で葉を沈めたり、もう一度違う葉を置いてみたりと、自分なりに試していた。B児が水の中の葉を見て、「魚みたい」と言うと、A児は「魚釣りをしよう」と、枝を釣りざおに、葉を魚に見立て、2人で魚釣りを始める。「見て！釣れたよ」と保育者に見せ、「いいのが釣れたねー。何が釣れたの？」と聞かれると、A児は「これはイルカで一す」と答えた。「それは大物ですねー」と保育者が返すと得意気な顔をして繰り返し行っていた。



保育者の援助

- 子どもたちの発見に耳を傾けて共感し、言葉をかけすぎないように見守る。
- 疑問に感じている姿を大切にしながら、見守ったり、さりげなく言葉をかけることで、子どもたちなりに試したり工夫したりできるようにする。

環境の構成

- 様々な自然物や自然現象の不思議さに気付き、遊びに取り入れられるように、園庭だけでなく公園にも積極的に出掛ける。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 大きな水たまりを見付け、いつもはないものがなぜ今日はあるのか疑問に感じ、枝で混ぜたり、沈んでいる葉を見付けて、別の葉を浮かべたりする。自然物を釣りざおや魚に見立ててごっこ遊びに取り入れる。
- ★ 友達のしていることや言ったことに反応し、同じことを一緒に楽しんだり、保育者と言葉のやり取りをしながら、ごっこ遊びをしたりしてイメージを膨らませる。

思考力の
芽生え自然との関わり・
生命尊重

協同性

言葉による
伝え合い

3歳児

1月「楽しそう！一緒にやってみたいな！」

これまでの幼児の姿（経験してきたことや育ち）

- 夏の時期にアイス屋さんごっこを楽しめるセットをつくり、保育者や友達と一緒にやり取りを楽しんだ。ままごとコーナーの隣に置くと、自分たちで取り出し、2～3人の友達と一緒にやり取りをして遊ぶようになった。

ねらい

- 自分の好きな遊びをしたり、おもしろそうな遊びをしている友達と関わって遊ぼうとする。
- 経験したことや感じたことを様々な方法で表現する。

エピソード

A児はアイス屋さんごっこを楽しめるセットを使い、「いらっしゃいませ」「何味がいいですか？」と店員になりきりながら、友達4人とやり取りを楽しんでいた。B児は製作コーナーで友達と一緒に丸い画用紙でお金をつくり、「そうだ！アイスを買に行けばいいんじゃない？」と目を輝かせながら伝えた。保育者が「いいね！おもしろそう！」と共感すると、アイス屋さんへ行き、B児「アイス4つください」、A児「アイスは1つずつです」とやり取りをした後、製作コーナーに戻り、「1つしか買えなかったから自分で買ってきてね！」とお金をつくっていた友達に話していた。その後、他の子もアイスを買に行っていた。

ままごとコーナーで一人黙々と料理をしていたC児。その姿を見たA児が隣で料理を始めた。何かイメージしていることがあるようだったので、保育者がそばで見守っていると、見ていた他児が「すみませ～ん！」と加わった。C児は「はい！何ですか？」とレストランの店員になり、周りにいた子もアイス屋さんレストランを行き来しながら、お客さんになりきって遊ぶことを楽しんでいた。



保育者の援助

- 一人一人が自分のイメージの中で遊んでいる姿を見守りながら、「何か素敵なことをしてるよ」「○○君は～してみたんだね」等、共感しながら、表現したことを代弁する。
- 今までの経験や友達の遊びから、自分なりのイメージを広げ遊んでいる姿を見守りながら、友達の存在や遊びに気づき、やり取りを楽しめるよう仲立ちをする。

環境の構成

- 継続して遊べるように、ままごとコーナーの棚に子どもたちがつくった物を常に置いておく。
- 製作コーナーに、いろいろな素材を自由に取り出せるように置いておく。（丸い形の紙、画用紙、木の実、紙袋、のり、クレヨン等）

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 別の遊びをしながらも、友達がしている遊びに興味を示し、友達やその遊びに関わることを楽しむ。 →
- ★ 思い付いたことや感じたことを言葉で友達や保育者に伝え、やり取りを楽しむ。 →
- ★ 生活や遊びの中で経験したことを、自分なりのイメージで表現しながら、遊びの中に取り込む。 →

協同性

言葉による
伝え合い

豊かな
感性と表現

社会生活との
関わり

事例から読み取る **3歳児** の特徴

基本的生活習慣の自立

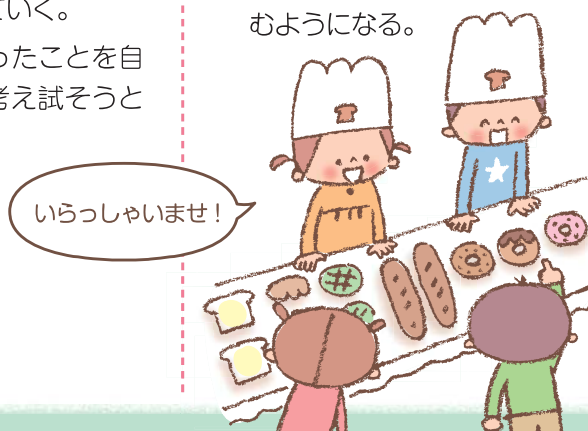
- 食事や排泄、着脱等の自立が進む。
- 自我が発達してくるにつれて、できなくても自分でやろうとする。
- 自分でできたことがこんなに楽しくうれしいことなんだと感じたり、満足感や達成感を味わったりするようになる。

なぜ？ どうして？
知識欲が高まる

- 知的好奇心から「なぜ？」「どうして？」等の質問が増えてくる。
- これまで知らなかったことを安心できる大人に尋ね、興味をもったものを通して新しい言葉や新しい世界の知識を増やしていく。
- 疑問に思ったことを自分なりに考え試そうとする。

保育者を仲立ちとして友達と
触れ合い、遊ぶようになる

- 友達と触れ合う中で、少しずつ分け合ったり順番や決まりを守って遊べるようになる。
- 一緒に遊んでいるようでも、まだ並行遊びのことが多い。
- 友達同士や保育者を仲立ちとして、生活で経験したことを取り入れてごっこ遊びを楽しむようになる。



この時期に

大切にしたい保育者の **援助**

- 一人一人の育ちの違いを認め、身の回りのことを自分でやりたいという気持ちの表出が見られたときは、褒めたり励ましたりすることで、意欲や自信につながるようにする。
- 思うようにできずに、保育者に頼る場面では、気持ちを受け止めつつ、子どもの気持ちが変わるタイミングを見極める。
- 気持ちをうまく表現できないときは、保育者が気持ちを代弁し、子どもの思いを受け止めていく。
- 「なぜ？」「どうして？」の質問は優しく受け止め、答えを知らせるだけではなく、一緒に考えたり共感したりしていく。
- 子どもが自分から試そうとしているときは、言葉をかけすぎずにそばで見守る。
- 子ども同士の思いの違いからトラブルになったときには、仲立ちとなり、それぞれの気持ちや思いをくみ取り代弁していく。そのことにより相手にも思いがあることに気付けるようにする。
- 子どもが自分で考えながら遊びが発展できるよう、アイデアやヒントを出していく。

この時期の

環境構成の **工夫**

- 基本的生活習慣の自立に向けて、手洗いの順序等について絵等を使い、分かりやすく表示する。
- 子どもが自分でしようとしているときは、その行為がやりやすくなるような場をつくる。(ロッカーの衣類の取り出しやすさの工夫、靴の着脱スペースの確保等)
- 子どもの興味や関心を捉え、自分から試したり、触れたりできる場や教材を準備する。
- 保育者が仲立ちとなりながらも、互いに関わって遊ぶ楽しさが感じられる場や用具の準備をする。

これまでの幼児の姿（経験してきたことや育ち）

- 園での生活に慣れ始めた頃、段ボールを使って、ロボットや船等の一人一人が作りたい物を保育者や友達と一緒につくっている。
- 園庭にこいのぼりが飾られると、風に吹かれて動く様子を見て「ゆらゆらしてるね」「泳いでるんだよ」「つくってみたい」という会話が聞かれ、こいのぼりをつくりたいという気持ちが高まってきた。

ねらい

- 身近な自然を感じ、取り入れて遊ぶ。
- 身近な材料を使って、自分の作りたい物をつくり楽しく遊ぶ。
- 自分のやりたい遊びを十分に楽しむ。

エピソード

A児が自分のロッカーから急いでビニール袋を持ってきた。「先生、これにひも付けて!」と言い、^{たこ} 凧のようなこいのぼりができた。それをベランダに置いて隣に座り、ひもを持ち袋をずっと見ていた。風が吹き、袋が半分くらい膨らむと、ひもを放し袋の横に寝転がり見ていた。袋が少し動くと大はしゃぎで置き直して、横に寝そべり風を待つ。どんどん移動する袋を追いかけて^{はだし} 裸足で園庭へ出ていった。園庭の端まで袋が動き、門から出そうになったところで、A児は袋をつかみ、見守る保育者を見て満足そうに笑った。そこで保育者もA児に「すごいね。あんなに遠くまで飛んで、先生もびっくりした」と楽しさを共感する言葉をかけた。

翌日、A児は再び園庭で袋を持って風を待っていた。それを見たB児が「僕も欲しい」と保育者に言った。昨日のA児の様子を見ていた保育者は、用意していたカラーポリ袋を提示すると「えっとね、大きいのがいい! だってもっとたくさん“風”つかまえるから!」と意気込んでいた。公園へ行くとB児はA児と一緒に^{たこ} 凧のようなこいのぼりを風になびかせ、ひるがえすように走りながら飛ばしていた。



保育者の援助

- 子どもの“どうしてだろう”や“不思議だな”という気持ちを大切に、一緒におもしろがったり、見守ったりする。
- 子どもが感じていることをじっくり試せるように、子どもが満足するまで見守る。

環境の構成

- 子どもの興味や関心を捉えて、自分から試すことができるように、ひもやビニール袋等の材料を準備する。
- 楽しんでいる遊びが、さらに発展できるように、別の素材を用意する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ どうしてこいのぼりが揺れているのか不思議に思う。
- ★ やってみたいことに挑戦し、満足するまで楽しむ。
- ★ こいのぼりをつくってみようとしたり、寝転がって風を感じようとしたりする。

自然との関わり・
生命尊重思考力の
芽生え健康な
心と体

自立心

豊かな
感性と表現

これまでの幼児の姿（経験してきたことや育ち）

- 園での生活や遊びに慣れ、自分のやりたい遊びを見つけて遊び始める姿が見られる。
- 保育者が牛乳パックでつくった間仕切りや中型積み木等を使って遊びの場をつくと、遊びにしたい物を持って来て、その中で遊び始める様子が見られる。
- 遊びの中で、自分のしたいことを動作や言葉にして楽しんでいる。

ねらい

- やりたい遊びを見つけて遊ぶ中で、思い付いたことや考えたことを自分なりの言葉や動きで表して喜ぶ。
- 近くにいる友達と、触れ合ったり、動きをまねし合ったりして楽しむ。



エピソード

A児とB児は、保育者が牛乳パックでつくった間仕切りで、丸く囲った場をつくり、それぞれが頭を洗うまねをしたり、肩にお湯をかける動きをしたりして遊んでいる。保育者は、「お風呂に入っているの？ 気持ちよさそうだね」と声をかけた後、「先生も、入ってもいい？」「うわあ、気持ちがよいね」と一緒に遊びを楽しむ。A児とB児は、保育者と一緒に体を洗ったり、湯船に入るまねをしたりして遊びを続ける。

翌日、A児とB児は、好きな遊びの時間が始まると、すぐに間仕切りで丸く囲った場をつくり、「お風呂ができた。ザブーン！」と言いながら中に入る。中で顔を見合わせたり、同じような動きをしたりして笑顔が見られた。保育者は、「今日も気持ちよさそうだね」「体を洗うのに、これを使ってみる？」と、準備しておいたシャンプーやリンスのボトル、タオル、シャワーを使うことを提案する。2人は、「使いたい！」と言って受け取り、ボトルからシャンプーを出す動きや、頭や体を洗うまね、また、シャワーで洗い流す動きやタオルを頭に掛けて風呂に入る動き等、様々な動きをして遊び始めた。



保育者の援助

- 子どもの楽しんでいる思いに共感し、一緒に遊びを楽しむ。
- それぞれが、同じような動きをしたり触れ合ったりする楽しさを感じられるように見守る。

環境の構成

- お風呂ごっこのイメージを膨らませて遊びを楽しめるように、丸く囲える間仕切りを用意する。
- 遊びが発展するように、子どもの思いをくみ取り、遊びに必要な物を用意する。（シャンプーやリンスのボトル、タオル等）
- 次に遊びたくなるときに遊び始めやすいように、出しやすい場所に片付ける。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

- ★ 遊びの中で、自分のしたいことや思い付いたことを、言葉や動作に表して楽しむ。 → 豊かな感性と表現、思考力の芽生え
- ★ ある物を見立てて使ったり、遊びに必要な場や物を自分でつくったりして楽しむ。 → 健康な心と体、自立心
- ★ 保育者に自分の思いや考えを、自分なりの言葉や動きで表す中で、受け止めてもらえたうれしさを感じる。 → 社会生活との関わり、言葉による伝え合い
- ★ 同じ場で遊んでいる友達と一緒に過ごすことや、触れ合うことを喜ぶ。 → 協同性

9月「おだんごをつくりたい」

これまでの幼児の姿（経験してきたことや育ち）

- 気の合う友達や同じ遊びをしたい友達と一緒に、砂遊びや泥遊びを楽しみ、使いたい用具や道具を自分たちで取り出して遊ぶ姿がある。
- 砂に水を吸い込ませてその様子を見たり、カップの中に砂と水を入れて混ぜたりして、素手や素足で砂や泥の感触を存分に味わってきた。
- 水がしみ込んだ部分の砂を使うと、おだんごや型抜きがうまくいくことに気付き、自分が発見したことを友達や保育者に伝え、それらを使って食べ物や虫等、様々な物に見立ててごっこ遊びを楽しんでいる。

ねらい

- 砂や泥の感触を十分に味わい、泥の不思議さや楽しさを感じる。
- 自分の気付いたことを言葉で表し、気の合う友達と関わる楽しさを感じる。

エピソード

M児が、湿った砂を使っておだんごをつくり始めるが、うまく固まらなかった。それを見ていたS児が、「お水が足りないんじゃない」と自分が使っていたお椀わんの中の水を、シャベルで数回かけた。M児は、それを受け入れて、またおだんごを握るが「なんか壊れちゃったよ」と言う。S児が、その言葉を聞いて、何度か水をかけた。M児は、黙々と握って見たが、水が多くおだんごが崩れてしまった。するとS児は「お砂が足りなくなっちゃったんだよ」と今度は砂をかけていく。また握り始めたM児が、あまりすっきりしない表情で「大きくなっちゃってできない」と言う。S児は、「もう1回ちっちゃいのでやってみたら」と提案し、また繰り返し水や砂を加減していった。M児は、「うん、これくらいいい」とおだんごをつくり上げ、顔を見合わせてにっこりとしていた。



保育者の援助

- 一人一人の子どもが楽しんでいることを見守りながら、同じ遊びをする友達に気付けるような言葉がけをし、友達と楽しさを共感できるようにする。
- 子ども同士のやり取りの中で、自分と相手の思いが違うことに気付けるようにし、タイミングを逃さず、それぞれの思いを知らせていく。

環境の構成

- 砂や泥の感触の違いが感じられるように、泥のある場と乾いた砂のある場をつくっておく。
- 水の量によって、砂が変化する様子を確認できるように、透明な容器や平らな容器等、様々な形状の容器を準備する。
- 遊びを通して、友達と関わりがもてるよう、テーブルや椅子等、同じ場を共有できる環境の構成にする。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の視点から、大切にしたいポイント

★ 形をつくったり壊したり混ぜたりして遊ぶ中で、砂や水の感触を存分に味わいながら、砂や水の特性に気付く。

健康な
心と体

★ 砂や水の量を加減し、つくりたいおだんごができるように、自分なりに考えたり試したりする。

豊かな
感性と表現思考力の
芽生え

★ 友達の様子を見て、自分の感じたことを言葉にしたり、伝えたりして楽しむ。

言葉による
伝え合い

協同性

事例から読み取る **4 歳児** の特徴

身近な環境への関わり

- 体のバランスを取ったり、左右の手で別々の動きができたりにするようになり、動きが巧みになる。
- 自然事象や身近な自然物、物の性質（事例は、風・ビニール袋・水・砂等）にも興味や関心を示し、触れて遊ぶことを楽しむようになる。
- 遊びの中で、自分なりに考えたり試したりし、様々な物の性質を知り、より豊かに遊ぶようになる。

自分のしたい遊びを実現する喜び

- 自分のやりたいと思ったことを自分なりに考えたり、工夫したりして遊ぶ。
- 自分の体験したことを再現して遊び、イメージを広げて楽しむ。

友達と遊ぶ楽しさと戸惑い

- 友達との遊びや関わりが広がり、友達と一緒に喜びや楽しさを感じる。
- 友達との関わりを楽しむ中で、互いの主張を通し、うまく相手に自分の思いを言葉や動きで伝えられない。

水をかけてみよう。



■ 自我が形成され、思い通りにいかないことへの不安や葛藤を経験するが、その気持ちを周りの大人に共感してもらい、様々なことに挑戦し、人の気持ちを理解していくようになる。

この時期に

大切にしたい保育者の 援助

- 経験による違いや一人一人の思いを受け止め、安心して園生活が送れるように柔軟に対応する。
- 保育者も一緒に遊びながら、子どもの興味や思いに寄り添い、子どもの思いや考えを引き出しながら、実現できるようにサポートする。
- 自分なりのイメージを広げて楽しむ時期なので、保育者も一緒に想像の世界を楽しんだり、周りの友達に伝えたりしながら、遊びが膨らむようにする。
- 子ども同士の言葉のやり取りや多様な感情体験を、発達上の大切な通過点として見守り、自分と違う考えがあることに気付けるよう仲立ちする。また、一人一人の思いや考えを伝え合うことで、互いのよさに気付けるようにしていく。
- 保育者は、ありのままの子どもの姿を十分に受け止め、子どもの自己肯定感や他者を受容する感情、様々なことに挑戦しようとする意欲を育てていく。

この時期の

環境構成の工夫

- 身近な自然物に興味をもち、そのおもしろさや変化に気付きながら試行錯誤して遊べるように、その素材の特性に応じて材料や場を用意する。
- 自分の思いを実現できるように、扱いやすい様々な素材や道具を、子どもが気付きそうな場所にあらかじめ設定しておく。
- 一人一人が十分に遊びを楽しみながら、友達との関わりも楽しめるように場を構成し、それぞれの遊びをつなげる。
- 気の合う友達と一緒に、イメージを広げていけるよう、見立てて遊びやすい素材や道具を用意する。また、ごっこ遊びの展開ができる場を用意する。
- 午前から午後、翌日へと遊びが継続、発展できるように、日々環境を再構成していく。